

震災1年に  
思う

思  
う

戦災時、甲府の街は激しい空襲を受け、私の家族は燃え盛る火の中を逃げ惑いようやくにして生き延びた。火の及ばない山の手の自宅で、炎上する甲府を眼下にしていたある友が、中心部に住まう私どもが凄絶の中にいるのに、安全な場所で街の劫火を眺めているしかない自分がひどく罪深い存在だと思わされた。とある酒席で語っていたことを思い起こす。親しき者の悲劇に身を添わせてやれなかつた自分が許せない、そういう懺悔の思いを抱え生きてこそ、人間は人間なのである。

瓦礫の受け入れ拒否の酷さ

大震災から1年が経つ。肉親や地縁の人々を失い、行方不明の人々がまだ3000人を超す。さまための声に悔愧の思いを深くし身をよじるような苦しみに苛まれ、哀悼と鎮魂を繰り返してなお癒されぬ己れに鞭打ち、復旧・復興へと歩を進めているというのが被災者の現実なのである。同胞の窮

境に対する何という仕打ちか。県内施設では処理不能な瓦礫が、県外自治体の受け入れ拒否に遭って行き所を失い堆積み上げられ、復旧への重大な障害となつていている。福島県では県内処理が原則とされている。酷い話ではないか。瓦礫の受け入れを表明した神奈川県の黒岩祐治知事が県民の理解を得ようと開いた対話集会の模様をユーチュープでみた。受け入れを表明している宮古市や南三陸町の瓦礫の放射線量は、東京都が受け入れている瓦礫の線量より低く、政府が設定した基準値を超え、政府が設定した基準値を超えるものではない、と知事の説得は条例を尽していた。しかし、会場は異様に剣呑な雰囲気に包まれ、「嘘をいいな」「万一被害が起きたら責任はお前だぞ」といった怒声がときれときれに聞こえる。

出されたほどに強いとは到底思えない。大半の人々は「日本人として瓦礫の受け入れは当然のことだ」と考えていよう。他方、不安に耐えられず安心を徹底的に追求するものではない、と知事の説得はされぬ己れに鞭打ち、復旧・復興へと歩を進めているのが被災者の現実なのである。同胞の窮

黒岩知事よ、知事の判断を支持する声なき県民が多数派であることを肝に銘じ信念を貫いてほしい。東京都に続いて静岡県島田市が市長の勇気ある判断によつて受け入れ直前今まで事を進めていく。日本人の同胞意識がいすれの国より強いことを私は信じる。首長が揺るがぬ判断を忍耐強く説き続けるならば、受け入れ拒否は震を誘発する連動型地震、首都圏直下地震が1世代、遅くとも2世代の間に起こることはほとんど不可能ではない。東海から南海にかけてマグニチュード8クラスの大地震が90～150年の周期で繰り返されてきたことは日本の歴史の真

過剰な安心求める小集団 神奈川県民の抵抗がここに映し

拓殖大学総長・学長 渡辺 利夫



拓殖大学総長・学長

渡辺 利夫

応がポイントであろう。

日本の国土は太平洋プレート、北米プレート、ユーラシアプレート、フィリピン海プレートの4つの巨大な岩板が組み合わさった、その真上に位置している。地下深くを対流するマントルに引っ張られて岩板が恒常的に動き、1つの岩板の岩板が潜り込んで形成される歪みがある限度を超えると、一挙に復元力が働き大地震と津波を引き起す。プレートテクトニクス理論によつて立証された

このリスクの大きな地表の上に、私たち日本人は住まつてゐる。実際、日本の地表面積は世界の0.25%でありながら、マグニチュー

d 6以上の大地震の20%が日本で発生しているといつ。安心とは、心休まらない過剰心理になれば心休まらない過剰心理の人間集団は、いずれの社会にも必ずや存在する。この心理を煽る政治集団もまたこの社会にも棲む。彼らは合理的な説明の全般を拒絶し、恰もそれが正義であるかのように振る舞う。小集団ではあれ、いや小集団であればあるほどその声は一段と大きい。

実である。日本に住まうといふことは、つまりはそういうことなのだ。ならば、私どもが今なすべきは、いつ起つてもおかしくはない災害に際して、血縁・地縁に連なる者をいかに守り、同胞の相互扶助の精神を涵養し、相互扶助の仕組みを再生するのである。

地域エゴに固執する者は自己が災難に見舞われたときに他の地域エゴの報いを受けざるをえまい。他者を助けずして自己のみが生存しようというのが道理であるはずはない。瓦礫の広域処理は同胞の相互扶助の精神の如何を問う重大なテストケースである。

安心とか不安というこの漠たる気分を赴くまことにしているのであれば、日本という國の上で生きていくことは難しい。安心はこれ追求すればするほど自己膨張をしていくことは難しい。安心はこれ重ね、結局はそれが不可能事と知つて出口のない閉塞感に人々を誘うのである。不安はこれを払拭せんと計らえば、一段と大きな不安を呼び起こして私どもを無闇地獄に落としかねない。強靭なる諦観の哲學を提示する知者、出でよ。(わたなべ としお)

# 地域エゴを越えてこそ眞の同胞